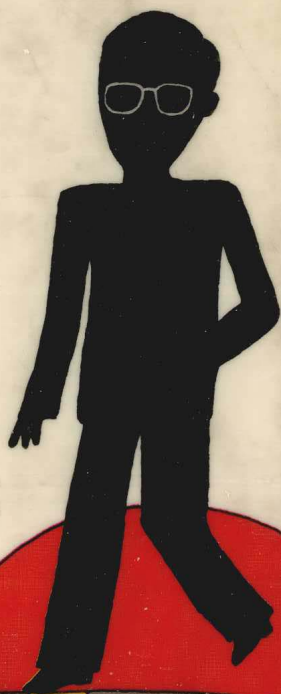
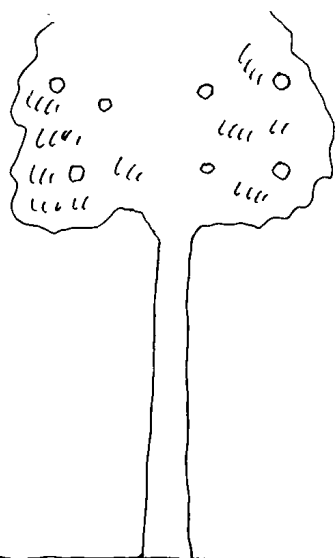


遠藤周作

足のむくまま
狐 狸 庵 風 来 帖
気のむくまま



遠藤周作



気	狐	足
の	狸	の
む	庵	む
く	風	く
ま	来	ま
ま	帖	ま

© Shūsaku Endō. 1982

足のむくまま 気のむくまま

《狐狸庵風来帖》

定価 900円

昭和五十七年五月二十日 第一刷
昭和五十八年八月五日 第四刷

著者 遠藤周作

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号(102)

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―二二二

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

◆内容目次◆

I

口惜しい話	1	1
音痴のコーラス	1	5
耻をしのんで	1	9
北杜夫讀	2	3
ハタンタン狸の……	2	7
死病への思いやり	3	1
ワラジムシ的健康法	3	5
小説家の経験	3	9
日本のミュージカル	4	3
色紙の文句	4	7
イヤミ的年頭所感	5	1

II

ユーモア漢詩	55
世界的壮挙のライندگان	59
ガンに感謝する!?	63
砂漠のスイカズラ	67
朝の寢床の妄想	73
おぞましきかな針類	77
老いゝ物忘れ↓妄想↓悪口	81
ラブリー・シュガー讃	85
ローマ法王もびっくり	89
余白とリズム	93
ミス・ユニバースの審査	97
魔女を求む	101
医者への注文	105

III

タレント売り出し作戦	109
一冊の本「死の受容」	113
かつらの見分け方	117
窓からの情景	121
結婚披露宴批判序説	125
故郷は遠くにありて思うもの	129
恋愛の極致のような経験	135
娘がほしい	139
珍発明、奇発明……	143
モンキー・ドライバー	147
狐狸庵蔵書録	151
イヤな人間のタイプ	155
傘張り浪人の頃	159

IV

二人の女の子	163
「樹座」大PR	167
小鳥と遊ぶ時間	171
「少し足りない」は「スレてない」	175
むかし遊んだ女	179
遅すぎてスピード違反	183
宝塚スターとのお目見え	187
暑さの中の妄想	191
私を落第させた映画界	197
少年の頃の食べもの	201
初恋の人	205
猿芝居	209
視点を変える	213

たのしき哉、ファン・レター―― 217

東洋医学を見直せ 221

佐藤愛子への反論 225

解せないこと 229

私のゼイタク 233

老いとボケ 237

群集心理に惑わされるな 241

犯罪考現学 245

秘密の重荷 249

《あとがき》 253

装
幀

和
田

誠

足のむくまま

気のむくまま

《狐狸庵風來帖》

I

口惜しい話

F産婦人科病院の、あまりに言語道断な診療ぶりが世間の憤激をかった。眼先の早いテレビが早速、人気番組の「水戸黄門」に悪徳医師を登場させ、黄門さまにこらしめられる話を作っている。さすがに生き馬の眼をぬく東京のテレビだ。

こういう病院や医師が出ると、迷惑をこうむるのは良心的な立派なお医者さまであろう。私は、文字通り「仁医」と言ってよい人間的な医者进行何人か知っているが、世間では一人の悪徳医師を見るとそういう仁医を忘れて、医師全体を色眼鏡で見してしまう。と言うより、こういう事件をきっかけにして、今まで自分たちが病院や医院で受けた不快感、屈辱感を一気に爆発させてしまう。

「患者の立場ですから、センセ、センセと言っておれば、思いあがりやがってますわ」

「医者というのは、決してあやまん人種だな。注射のやり方が下手でこっちの腕がはれあがっても、決してスマンとも言わん、治るために痛いのは当り前だという顔をしてやる」

多かれ少かれ、病院や医院に行った者は右のような不満を胸に持っているらしく、今度のような事件が起きると、いい気味だと考える者も少くない。しかし医者の百人が百人、こうではない。本当に患者のために思う先生も七十人はいるのだ。だから今度のF産婦人科病院のような事件は、そこで受診した患者には癒しがたい被害を、そして多くの良心的医師にも、眼にみえぬ迷惑を与えるものである。

歯医者というのは面白いもので、たいていの場合、患者が前に別の歯医者から受けた治療をよく言わない。それは女流ピアノリストが決して他の女流ピアノリストの演奏をほめないのと同じなのである。

「ああ、困った治療を受けましたな。歯は抜けばいい、というもんじゃないんです。使える歯は使

える限り大事にしくちやァ。それを抜くなんて、とんでもない話です」

たしかに、そうに違いないのだろうが、当方の虫歯を三年前に引き抜いたのは当方ではない。それを当方に文句を言っただって、こっちは何もわからぬ患者なのである。

いつだったか、ある若い歯医者にかかったことがある。この歯医者は私の歯のあまりのひどきに、びっくりした。

「こりゃ、ひどいな。どうしよう、どうしよう」

どうしよう、どうしようを連発している。そして同じ診療所にいる同僚をよんできて、

「君、見たまえ。こんなひどい歯は珍しいね。教科書にしか載っていなかったような虫歯だな」

と二人で嘲るように言った。この言葉はあきらかに言わずもがなの侮辱的言辞である。私はムツとしたが、しばらくそこに通ってから、急に別の歯医者に変えた。

この歯医者は前の歯医者の舅で、腕がいいという評判だった。私はこの人が有名なから変えたのではなく、自分が受けた無用な侮辱に仕返しをするためにそうしたのである。

「では拝見いたしましょう」

とあたらしい歯医者は私の口を覗きこんだ。そして私の予想通り、前の歯医者の腕をけなしはじめたのである。

「困った治療をお受けになりましたねえ。こんなことをしなくてもよかったのに……どこで、こんな治療を受けたんです？」

私はこの瞬間を待っていた。口にたまった唾を飲みこんで、私は静かに答えた。

「先生の婿にあたられる人です」

あたらしい歯医者はウツ、という表情をした。

また思いだすのも不快なくらい悪い医者にかかったことがある。一年ほど前のことだ。私はある朝、右足のつけ根のあたりと右腰とに痛みを感じて眼ざめた。腰といい、つけ根のあたりといい、その痛みは寝床の私にあまり良くない下半身の病気を想像させた。たとえば膀胱炎とか腎臓炎とかである。

これは薬屋で売薬などを買ってすませられないと思った。ふと私は自分の仕事場の近くに、泌尿器科と看板を出している小さな医院のあったことを思いだした。いかに病気とは言え、泌尿器科と書いた医院をたずねるのは決して愉快なものではない。むしろ耻しい一言につきる。私はあまり患者の来ない午後四時頃を選んでその医院をたずねていった。

医院の待合室には誰もいなくて、診察室から医師らしい老人と患者らしい青年の声が筒ぬけに聞えてきた。青年は注射をうたれているらしく、

「痛エ」

と叫んだ。すると、

「遊んで悪い病気をもらったくせに痛いもへったくれもあるものか」

老医師の叱りつける声がある。その青年はやがてズボンをずりあげずりあげ、逃げるように帰っていった。そして私の名が大声で呼ばれて診察室に入った。何も大声を出す必要もないのである。

うすぎたない診察室のうすぎたない机の上に注射針やアンブルが転がっている。西陽が窓から流れこんでいる。老人の医師は私をじっと見て、

「どうしたんかね」

事情を話すと、彼は何もきかず、

「あんな、遊んだらうが……」

と言った。びっくりして、憶えはないと答えると、

「かくさんでもええ、わかつとる。トルコかおサワリバーにあんた行つたろうが……」

「行きません」

「かくさんでもええ。わかつとる」

どう否定しても、彼は私の言うことを信用してくれない。その上、検尿をすると言うから、私が無実を証明するためにもその通りにすると、それをチラッと見て、

「ほれ、雑菌がウヨウヨいる」

と言った。冷静に考えれば、顕微鏡も使わないで菌が見える筈はないのに、その時の私は、それがとも角も医師の言葉だけに愕然としてしまった。

「あんたはそんなこととして奥さんや子供に耻しくないか」

注射をうちながら彼はまた私に説教をした。注射が終ると注射代五千円を請求した。

仰天した私は次の日、しかるべき大病院のS博士に診察を乞うた。もちろんいろいろ検査してもらった。当然のことながら結果はマイナスだった。そしてS博士はこれは泌尿器科の病気ではないと言われ、同僚の整形外科のT博士をよんできて、レントゲン写真を撮らせてから、二人で、

「遠藤さん、あなたのは変形腰椎と言ってね、ある年齢になると腰の骨が老化して痛む症状です。毎日、机に向っている職業病ですな」

と結論を出してくださった。

それにしても、雑菌がウヨウヨいると言い、無実無垢の私を叱りつけ、痛い注射をうち、五千円をとりあげたあの老医者め。その医院の前を通るたび私は怒鳴りつけたい衝動にかられる。

(編集部注・古人曰く、老いは齒から、腰痛は遊びすぎからくるのデス……?)